

生涯学習社会への移行と

私たちの生活

記念講演

日本学術振興会理事長 木田 宏



今日、教育の議論をいたします。ときには、どうしても21世紀のことを踏まえて考えなければなりません。

今年の4月に、国民生活審議会から長寿社会の構図という、たいへん読みがいのある答申がまとめられました。

この答申は、21世紀への日本の社会・経済の変化を、急激な長寿社会に入っていくことに大事なポイントを置いてとらえ、日本の将来を考えるという内容になっています。

その中で、どんな変化が、我々の市民生活の中に取りこみ、どうい

もう一つは、情報が瞬時に世界を流れるということから、我々の生活がたいへん国際化してきているということであり、今日の国際化というものは、この情報化とあいまって、我々の一人ひとりの生活が、一つひとつの事業が、全部国際的な関わりを持ち、しかも、それがお互いに関係しており、自分だけで勝手に考えられないということでもあります。

日本で金利を下げるというのは、隣のアメリカでどうするかということに運動するわけですから、国際化という問題は、情報化とあいまって、我々の生活にたいへん大きな変化を加えてくれるわけになっています。

労働時間と余暇時間

現在、労働時間は、生涯を通じてみて、11万4千時間になっております。これが21世紀になると9万2千時間ぐらいに短縮し、反対に余暇時間は、現在の16万2千時間から18万8千時間ぐらいに増えるであろうと予想されます。暇を持っている時間の方が、仕事をしている時間よりも、はるかに大きくなっていく、こういう日本が考えられてきます。

県民の生涯学習に寄せる期待と関心は、年々高まってきています。県内には、自ら学習意欲に燃えて、積極的に生涯学習に取り組んでいる方がたくさんいらっしゃいます。

ここに、「私の生涯学習」と題して四人の方の実践例を紹介し、生涯学習への参加を大いに期待しています。

うことを考えておかなければならないかということが、かなり要領よく述べられております。

21世紀を考える

高齢化

現在、高齢者の数が人口の1割3.3%でござりますが、21世紀には、これが22%近くに上がるといのが今の見通しでござります。現在は、働き盛りの人が、高齢者と若子ども、いわゆる従属人口をかかえて生活を営み、国家、国民の活動を維持しており、その従属人口の比率が43%ですが、これが21世紀には65%にもなります。

そうすると、人口の2割ぐらいいの人が、他の人を支えていくという構造になってしまふわけであり、

生きがいを与えるが、現役の勤労者の負担をどうやって過重にならないようにするか、といったことを国民全体の課題として考えておかなければなりません。

21世紀からの警鐘

情報化という社会は、発展すればするほど弱さが出てくる危険があり、国際化の問題も上手にやっついていかないと日本は嫌われ者になってしまう。高齢化を迎えるこれからの国民生活は、できるだけ生きがいをもって、生活の意味を高める努力をしていかなければなりません。

雇用問題、医療問題、年金問題などを、我々の生活の課題として考えていかなければなりません。

今日、国民医療費は15兆円ですが、21世紀に入ると60兆円と予測されています。教育費は、子どもの数が減りますからあまり増えませんが、国民の教育費よりも医療費の方が、はるかに大きくなっていきます。

教育を受けるのは学校へ、学校を終わったら職場へ、定年が来たあとはゆとりくるといいう人生パターンは成り立たなくなっていく、あるというのが今日の端的な姿であります。

そして、失業率は、21世紀に入る昭和75年に現在の倍になるだろうという予測がたてられています。

情報化

私は、この情報化というのは、知識の流通量が非常に大きくなる社会だといふように考えるのでござります。

知識は、昔から人間がこれを大事にして、その知識によって生活を営み、生産をあげてきました。緑の窓口での指定席券、放送による道路交通情報等、我々は情報をもとに行動することになります。ですから、知識を自由に使える人の方が、使えない人よりも生活力が旺盛で行動力がよいというのは、昔から変わらないということなんです。

ですから、これから生きていくために、仕事をするために常に勉強していかないと生活できない、こういう社会に我々は足を踏み入れたい、ということを忘れてはならないと考えます。



教育・学習のあり方を考える

こういう意味で、教育のあり方、学習のあり方というものを考えていく努力をしていかなければなりません。

意味のある、活力の高い生活をするために、知識を上手に選択し、自分でそれを上手に使った人ほどが、健康を維持し、仕事を発展さ

農家での作物づくりにおいても、今日、明日、明後日の値段がどうなるかという知識、隣村の情報だけでなく、カリフォルニアのオレンジの作柄と関係する、その情報があるかないかによって、農家の方々の、その生産に取り組む姿勢と意欲をはじめ、いろいろな点で違ってくるわけであり、

このように、知識というものをどう使い、我々の生活の行動力をより豊かにしていくかということが、急速に高まってきています。知識をどのように生活にプラスさせていくかということは、それぞれの人の大事な知恵であります。こういう情報化が一方で大んどん進んでいくということであり、

国際化

せるということになります。そういう学習が生涯可能になるようにしていかなければならないのであります。

生涯学習というのは、決して暇な時間つぶしではない。一人ひとりが自分で生きるために考えていかなければならない基本課題であります。

生涯学習というスペクトルで今の教育システムを考え直してみると、それは人間の生活のあらゆる側面に知識というものをどう使うかという課題、あるいは、人間の健康をどう維持するかという課題としてつながっていきます。教育というのは、基本的には自己学習であります。それは同時に、環境のなかからいろいろな情報、栄養それを吸い取って大きくしていくということでもあります。

学習という各人の活動が、健康の保全、産業の発展、福祉の増進に連なっていくのであります。

国民生活のすべての側面にわたって学習の素材を提供していく、これだけの広がりを持ったものとして生涯学習という問題を考え、生涯教育のシステムを作っていくことが、生涯学習社会への移行と私たちの生活の当面している課題であると思っております。